

Will Project 2007

Will Project 6年間の足跡

「この地区の優秀な生徒が集う能代高校だが、将来を担うような人材を育てられているのか、先生方は一体どういう生徒を育てたいと考えているのか」

平成18年春、就任2年目の井上高廣校長が職員会議で問いかけたこの言葉からWill Projectが始まったと記憶している。将来構想検討委員会が組織され、職員ディスカッションやアドバイザーとの意見交換、生徒会・保護者・同窓生からのアンケートを繰り返しながら、能代高校の指導指針となる将来構想（次頁）が練り上げられていった。社会人講話やインターシップを柱に据え、将来、職業を通して社会へ貢献する意識を高めようとする能代高校の取組は、キャリア教育の必要性を唱える社会の潮流と重なり、また、文部科学省の研究指定を受けたことで、全国的にも注目される先進事例とされるに至った。

さて、多くの高校で総合的な学習の時間を中心に実践されるキャリア教育だが、本校の

Will Projectは、学校全体の指導改革であったという点で、他のそれとは大きく異なっていた。それゆえ、イベント的な講話や体験学習以外の面でもさまざまな改革がなされてきた。実施初年の19年度は、家庭と情報の授業を1年次の履修とし、授業と将来設計・調査研究との連携を図った。20年度には、目標達成型授業を打ち出し全教員で授業改善に取り組んだ。21年度からは、総合学習の時間とLHRの時間を連動させ柔軟な講演行事の実施を可能にした。22年度には、週32単位から33単位にカリキュラムを変更、さらに23年度には、新教育課程（理科の履修科目増）に対応するため45分×7時間授業を導入した。24年度には、全校生徒対象の進路講演会（現Will Project講演会）を復活させ、桑田真澄氏や茂木健一郎氏、竹中平蔵氏といった著名人の信条に触れる機会を得た。25年度からは、生徒の実情と学年の意向を計画に反映させるため、学年部とキャリア推進部が連携して総合学習の実施にあたっている。今後は、能代高校を取り巻く環境の激変や32年度に実施される大幅な入試制度改革、アクティブラーニン

グに代表される指導法の改善を見据え、日常型キャリア教育を実践する柔軟なカリキュラムと担当教員のスキル向上が不可欠になると思われる。

9年間を振り返り今改めて思うことは、多くの関係者の願いが込められたWill Projectが目指した人材育成は、その後の答申や報告で示されたキャリア教育の理念そのものであったという先見性である。この大きなテーマに、試行錯誤しながら学校独自に向き合い続けてきた実績と蓄積こそ能代高校の大きな財産ではなかったかと感じている。本プロジェクトが卒業生の人生にどう寄与してきたかの検証は容易ではないが、今後も教員一人一人が生徒の将来を鑑み、計画・実施に想いを込めていくことが重要であると考えている。十年後の創立百周年には、Will Projectで育った多くの卒業生たちが能代の内外で活躍し、記念誌で夢や志の続きを聞かせてくれることを期待している。

Will Project

～夢と志をはぐくむ学校を目指して～

基本方針と今後の取組について（まとめ）

構想検討委員会（H.19.3）

1. 「Will Project」の基本的考え方

- ◎「人を育てる」ことを明確に意識した、人づくりのシステム化を目指す。
- ・生徒・職員のモチベーションを高める取組であること。
- ・学校を変える起爆剤となるものであること。

2. 基本方針

(1) 目指す学校像と人間像

- 学校像：夢と志をはぐくむ学校
- 人間像：様々な分野で日本や地域の中核を担う、心身ともに健康な人間

※地域の進学校としての立場を堅持し、生徒の能力や特性を最大限伸ばし、生徒が自らの夢の実現に向かって歩んでいくための土台をつくる。

(2) 目指す生徒像

- ①礼儀を含め、基本的生活習慣が確立している生徒。
- ②自己の可能性に挑戦する気概を持った生徒。
 - a) 確かな学力を身につけた生徒
 - b) 主体的に学び活動する生徒
 - c) 明確な将来目標と達成意欲を持った生徒
- ③心と体を鍛え、健康で心豊かな生徒。

(3) 指導の柱

- (i) 基本的生活習慣を確立する。
- (ii) 己を知り、他を知り、社会を知ること、学びの意欲を高める。
- (iii) 学習指導の改善
- (iv) 文武両道の堅持

3. 具体的取組について

(i) 基本的生活習慣の確立に向けて

- ①マナーアップ指導
- ②礼法指導の実施
- ③規範意識の向上にむけた取組
- ④家庭との連携
- ⑤年間指導計画の作成

(ii) 自他を知り、社会を知ること、学びの意欲を高めるために

- ①「総学の時間」を用いて、「学びの意欲を高める」取組を行う。
- ②各学年の取組
 - 1 年：「聴く、調べる、表現する」
テーマ：探求活動をととして社会を知り、自分の夢について考える。
ねらい：夢を持たせるとともに、調査力、整理力、表現力をつける。
 - 2 年：「体験し、志を高める」
テーマ：体験活動をととして自分を知り、社会で

の役割を考える。

ねらい：自主的活動を奨励し、計画・実践・まとめ（発信）・自己評価できる力をつけるとともに、ライフプラン作成能力をつける。

3 年：挑戦する気概を育てる。

テーマ：進路別探求活動をととして、進路目標に関する研究を深める。

ねらい：自律心と向上心、目標達成意欲をたかめ、困難に負けない力をつける。

③3年間の指導計画…【別紙資料】

④運営体制

- (ア) 進路指導部に「専任」をおいて対応する。
- (イ) 「専任」と進路・総務・教務の各主任、学年部担当で「Will Project 推進委員会」を構成し、企画・調整と実務を行う。

(iii) 学習指導の改善について

- ①カリキュラムの改訂
- ②日課表（時間割）の見直し
 - (ア) 時間割は次の通り。
 - 50分授業週3日6コマ、週2日7コマで実施。
 - 7コマの曜日は、火曜日と木曜日。
 - 総合学習は水6校時、LHRを木7校時に実施。
 - 理数科の課題研究は、7時間目に確保する。
 - SHR、「面接時間」を確保する。
 - (イ) 退校時間について
 - 「部活教養日（自学の日）」は、毎週火曜日。
 - 部活休養日以外の日は、生徒は7時までに退校、職員は8時までに退勤することを原則とする。特例を認める。

③朝学習・土曜学習・補習・AO対策等の効果的実施について

- (ア) 朝学習・土曜学習について
- (イ) 平常時補習の実施について

④授業改善研修の充実について

- (ア) 本校で目指す「良い授業」とは
- (イ) 研究授業の実施
- (ウ) 授業アンケートの実施
- (エ) 教育専門監や指導主事、予備校講師による授業を参観・研究会の実施
- (オ) 校内授業専門監の設置。（検討事項）

⑤評価法の研究 ⑥学力向上対策の研究

⑦個別指導の改善

(iv) 文武両道の堅持について

- ①部活動の奨励・活性化 ②学習時間の確保
- ③教科外能力の評価 ④人間性の錬磨

（注）紙面への掲載の都合上、主な項目を取り上げて、詳細な記述は一部省略している。

Will Projectに携わって

秋田県教育庁高校教育課

藤原孝一

能代高校には生徒として3年間、教諭として13年間お世話になりました。そのうちの4年間を進路指導主事として、Will Projectの構想から立ち上げに携わりました。

多くの生徒の進路目標を叶えるためにはどうすべきか。これは古くて新しい問題です。平成18年度、この問題について全職員で話し合うと同時に、生徒の代表である生徒会役員とも意見交換を行いました。そして、約9か月間の検討を経てWill Projectが始まりました。平成19年度からの3年間、文部科学省の指定事業を引き受けたこともあり、今でも進学校におけるキャリア教育の先駆的な取組として全国の注目を集めています。その意味でも、能代高校が現在多くの高校で推進しているキャリア教育のパイオニアであるということも過言ではないと思います。

「大きな夢と高い志」を育て、生徒が主体的に活動するようになるため、先生方は「すべては生徒の幸せのために」を合い言葉に、生徒に惜しみない支援を行いました。当時の取組は、実際に体験してみることと、考えていることや感じたことを話し合うことで夢や

志を深めていくことに主眼を置いていました。現在もその流れは変わっていないと思います。

実際に体験することで、実感が持てたり、考えが変わったりします。また、考えの浅い部分を指摘されることで、更に深く掘り下げて考えることができるようになっていきます。今でもクラス担任や学年の先生方との面談は、時間をかけて複数回行っているのではないのでしょうか。

この取組を軌道に乗せるため、多くの団体や企業と交渉したことから、学校外部の教育力を活用する術と大切さを学びました。この経験は今の仕事にも役立っています。また、多くの先生方と協力し合って事を成し遂げるとき勢いや気力は今でも忘れられません。

この取組もそろそろ十年目を迎えます。次の十年に向けて、更に進化したWill Projectを全国に発信して欲しいと思います。自分の思いを心の中に温めておくことも大切ですが、言葉や形にして外に発信することも大切です。自分の夢と志を実現していくためにはどうすべきか。この高墙の地で、多くの仲間や先生方とともに語り合って欲しいと思います。

Will Projectの先見性

筑波大学人間系

教授 藤田晃之

私がWill Projectに出会ったのは2007（平成19）年度のことだ。スタートしたばかりのこの取組に対して、アドバイザーとして関わる機会を与えていただいたのである。それまで、秋田県にすらご縁のなかった一人の大学教員に過ぎない私がこの経験に恵まれたのは、まさに幸運としか言い方がない。

その翌年、私は、国立教育政策研究所生徒指導研究センター（現・生徒指導・進路指導研究センター）におけるキャリア教育担当の総括研究官として赴任し、同時に、文部科学省初等中等教育局児童生徒課でキャリア教育担当の生徒指導調査官を兼務することとなった。Will Projectの価値とそれに出会えた幸運を実感したのは、まさに、国のキャリア教育推進行政の一端を担う役割を与えられてからである。

「若者のフリーター志向」が社会問題とされていた当時、高等学校におけるキャリア教育をめぐるのは「就職希望者が多い高校でなされるべきもの」という認識が主流だった。このような中で、国立教育政策研究所及び文

部科学省の双方において私に与えられた重要な任務の一つは、「このような矮小化された理解を解きほぐし、社会的・職業的自立に必要な幅広い力の育成をめざす本来のキャリア教育理念の確立を図ること」であった。

無論、この任務の遂行が容易でないことは火を見るより明らかである。それゆえ、私は当該任務にあたる過程において、頻繁にWill Projectを事例として用いた。例えば、全国各地での教員研修の機会に、「大学進学を志す生徒にとっても、大学教育の向こう側にある社会の現実を展望することは重要です。例えば、秋田県立能代高等学校では……」「キャリア教育を通して生徒がどれだけ力を身につけたかを見取り、それを踏まえて翌年度の計画を練り直すことがポイントです。ここで事例として紹介するのは能代高校のWill Projectで用いられる調査票です」等々と述べたことは、数限りない。また、全国的な研修会やシンポジウム等で、能代高等学校の先生方にご登壇いただいたこともたびたびあった。そして今日、キャリア教育をめぐる認識は、ゆっくりではあるが着実に変容を遂げてきている。少なくとも、「就職希望者が多い高校でなされるべきもの」という誤解は氷解しつつあるし、PDCAサイクルを基盤とした実践の意義も認知されるようになった。この変容をもたらした「主役」は、他で

もない、Will Projectの先見性だと言えよう。Will Projectの継続と更なる発展に心から期待したい。

Will Projectがうみだしたもの

リクルートワークス研究所

辰 巳 哲 子

今では「キャリア教育」をご存じない高校教員はほとんどいないと思うが、当時は進学校でのキャリア教育は珍しかった。にもかかわらず、当時の井上校長は、「これはうちの学校の生徒にこそ必要な教育だ。ただし、文部科学省の言っているキャリア教育をそのままやってもうちの学校の生徒に合うとは思わない。能代の生徒にあわせたやり方を考えなくてはならない」と言い切っておられた。つまり、能代高校による能代高校の生徒のためのオーダーメイドのプロジェクトを創っていくとされていたのだ。こうして全員が手探りの中でのプロジェクトがスタートした。東京から一緒にお伺いした藤田先生は、英語の方言は聞き取れるのに秋田弁は聞き取りが難しいらしく、最初少し緊張されていたことを覚えている。そして、この時はまだ誰も予

想しなかったことだが、この後、能代高校のWill Projectは、視察や講演会、雑誌の取材など様々な機会を通じて、「進学校のキャリア教育」として紹介された。能代高校の取組から学び、実践に反映した学校も多かったのではないかと思う。

当時は、私たちが能代高校にお伺いするたびに、校長室を半日以上占拠し、授業の終わった先生方が入れ替わり立ち代わり校長室に入って来られて、能代高校の目指す生徒像についての熱い議論が続けられた。進路指導主任だった藤原先生からは、「目の前の学力を先に上げるのか、将来働くことについての目標を持たせることが先なのかがよくわからないのです」といった疑問を正直にぶつけていただいた。

このプロジェクトでは、アンケート調査や学年主任の先生への聞き取り、教員研修会も何度も実施し、生徒の感想も聞かせていただいた。最後に当時3年生だった生徒らの言葉を引用して終わりたいと思う。

「化粧をした時に違う自分になれたような気がしたから化粧品のメーカーに入って開発をしたい」「母子家庭の貧困問題を厚生労働省に入って解決したい」「日本語が話せなくて困っている外国人のお手伝いがしたい」「自分が見た真実を皆に伝えたい、新聞記者になりたい」。皆、自分の生活のすぐ近くにある

大きな問題を、自分の「働き」の中で解決する方法を見出そうとしていたのが印象的だった。彼らはもう働いていることだろう。今どのような働きをしているのか、Will Projectが現在の彼らに、少しでも何かを残せていたらうれしく思う。

最後になりましたが、Will Projectと一緒に仕事をする場を与えていただいたことに心より感謝申し上げます。



講演会（竹中平蔵氏）

夢を描いたWillプラン

80期 中嶋 優奈

世の就活生が一番はじめにぶつかる問題は、自分が「何をやりたいのか」という問いだと思う。周りが頭を悩ませる中、私は高校時代からずっとこの問いと何度も向き合っ

てきた。Will Projectの「Willプラン」だ。将来自分がやりたいことは何なのか、そのために自分がすべきことは何か。高校時代から、将来について真剣に考えてきた。だからこそ、大学入試後も目標を見失わずに行動することができたと思う。

高校時代、「世界を舞台に働くこと」が将来の目標だった。そのため英語教育に力を入れていた大学を選び、世界史を専攻し、大学時代は中国へ1年間の交換留学に行った。しかし、中国留学中に尖閣諸島国有化の問題が勃発、反日デモが各地で起きた。中国人に面と向かって「日本が嫌い」と言われ傷ついたこともあった。しかしそのような状況下でも日本を「好き」と言ってくれたのは、日本の「アニメ」が好きな人たちだった。このことから、アニメをもっと世界に届けたいと強く思うようになった。「アニメを世界へ」、この夢は能代高校時代、周りの友人や担任の先生に語っていたものでもあった。高校時代胸に抱いた夢が、就職活動の際にまたふつふつと沸きあがってきた。

行きたい業界が決まったものの、道は険しかった。就職活動が始まり、受験企業が一つ、また一つと減っていった。その中で、アニメ業界最大手の最終面接に残った。面接前日は、全く寝付けなかった。これに受ければ高校時代からの夢が叶う、というプレッシャー



インターンシップ（秋田空港）

が大きかった。思い出すのは、高校時代進路希望書に「アニメ会社」と書いたこと。そして友人や先生と夢を語り合った日々。負けないと思った。

内定の連絡を頂いたときは、文字通り飛び跳ねて喜んだ。「勝った」と思った。学歴や語学力だけではなく、容姿や性格を含めたその人そのものが試される、「就活」という学生時代のラスボスに勝ったと思った。

この4月から、学生を卒業し社会人として働き始めた。徹夜で履歴書を書き続けた日々、雪が降る極寒の中並んだ説明会、緊張で倒れそうだった面接、苦しい記憶ばかりが思い出される就職活動。しかし、ようやく高校時代から描き続けた夢の入口に立つことができた。これから先何が待ち構えているかは

わからない。でも、高校時代培った、夢を叶えるために「今」何をすべきかを考える姿勢をこれからも忘れず、努力し続けていきたいと思う。

Will Projectを通じて

3年 佐々木 佳音

「お母さん、私、レンジャーになりたい」「何レンジャーよ。赤レンジャーか?」

このように母に返答されるほど、レンジャーこと自然保護官の仕事は、あまり知られていません。彼らは環境省の職員で国家公務員です。国立公園などの管理や、動植物の保護・調査など幅広い活動をします。私は能代高校のWill Projectの一環であるインターンシップで、是非その自然保護官の仕事を体験させてもらおうと、白神山地世界遺産センターを訪れました。

体験したのは、子ども達を対象にした川での自然教室の補佐です。子ども達が水生生物を捕獲したり、川遊びをしたりするのを見守りました。はじめは、これもレンジャーの仕事なのかと疑問に思いました。私が描いていたイメージとは異なる「子どもと楽しく接す

る先生」であつたからです。白神山地世界遺産センターに駐在するレンジャーの方にお話を伺ったところ「こういったイベントを主催し、地元と連携・交流するのも仕事。地域と良い関係を築くことが重要」とおっしゃっていました。私は、「地元の方々の協力無くしてはその地域の自然は良くならない。広い交流を持ち、人と向き合うことが第一だ」と考えさせられました。

またこの体験教室には青森側の白神山地を守るレンジャーの方も来ており、お話を伺いました。「仕事の量が多く、土日が潰れることもしばしばあり、責任が重い。その一方で、仕事で得られる知識がある。地元の方との交

理数科について

理数科この十年

本校理数科は平成15年に県内四番目の理数科として新設された。募集は理数科1クラス35名であるが、本校では普通・理数科のくくり募集の形をとっており、2年次進級時に普通科と理数科に学科が分かれる。平成18年

流が楽しい」とも話していました。責任も仕事量も多大だが、それに見合ったやりがいがあることは本当に素敵です。そして秋田と青森で協力し、同じ世界遺産を守る姿も格好良いなと思われました。

この冬、私は高山という白神山地を一望できる山に登りました。山々に積もった白雪の間から覗く青い山肌が綺麗でした。そしてこの美しい白神の世界遺産を守るレンジャーの姿を想い、将来の夢への士気を高めました。今回のインターンシップを通して、私が目指す職業やそれに向かう進路が遥かに明確になりました。この体験を今後の糧に、至誠力行に励んでいきます。

3月に最初の卒業生42名を送り出し、以来364名が理数科として巣立っていった。また、理数科の設置を記念して、平成16年3月にニュートンのリンゴの木が前庭に植樹された。

教育課程についてはくくり募集のため、1年次は普通科と共通であり、2年次より理数科独自の教育課程になる。普通科理数との違

いは専門教科として、理数数学、理数理科(物理・化学・生物)がおかれ、理型の数学、理科より単位数(授業時間数)が多いことと、理数科独自の科目として課題研究がおかれていることがあげられる。設置当初は、理科の履修科目が理型の2科目に対し、理数科は3科目だったが、現課程になってからは理型も3科目となった。

課題研究は理数科の必修科目で、年間を通して毎週1時間実施される。理数科の生徒全員が数学、物理、化学、生物の4分野に別れて、6人程度の班を編制する。班ごとに決めた研究テーマに基づいて、調査、実験、議論などを行い、最後に報告書としてまとめる。課題研究に教科書はなく、研究テーマや調査、実験など、どれも班ごとに自分たちで考えて進めていかなければならない。授業時間内では終わらないため、放課後や夏休みなどの時間を確保して活動することになる。テーマ解決のため、試行錯誤を繰り返しながら研究活動を行うところに難しさがあり、同時に、問題の発見能力や解決能力が培われることにもつながる。

課題研究の発表の場として、10月には校内課題研究発表会が、また、11月には秋田県理数科合同研修会が実施される。このような発表会を通して、コミュニケーション能力や情

報発信能力が磨かれる。また、県内他校の理数科の生徒との交流も図れる。

理数科では課題研究の他にも、大学教授による招聘講座、白神山地自然観察会や高校生国外派遣事業のソウル高校との交流など、普通科にはない特色ある取り組みが行われている。このような活動を通して、柔軟な思考力と創造的能力を育成しながら、未来の科学者・技術者の育成につながるよう日々奮闘している。

ノーベル賞を目指して

元理数科主任 佐々木

誠

能代高校には平成6年4月から14年間お世話になりました。その間、選択演習による7コマ授業、朝学習、55分授業など、様々な組の導入が行われて来ました。そして、平成15年度から理数科が設置されることになりました。

平成6年度から平成13年度まで、国公立大学の合格者数は毎年のように100人を超えていました。しかし、理数科が新設される前年度から、在籍生徒数の減少もあり二桁の人

数にとどまる結果が続いていました。理数科の新設は、当時の職員に、必ずしも望まれたものではありませんでしたが、能代高校にとっては、何かを変えなければならない時期だったのだと思います。結果的に、理数科設置の3年後からは、国公立大学の合格者数も三桁を取り戻し、平成19年度には過去最高の合格者数を記録することになります。

平成15年度に新設された理数科は、「普通・理数科」のくくりによる募集を実施し、平成16年度の2年生から男子18人、女子24人、計42人を1期生として、本格的に開始されました。

以前の能代高校は、進学実績を伸ばすための教育活動に奔走し、教育課程も大学入試を中心に見据えたものでした。例えば、医学部医学科を目指す場合、受験に必要な理科の科目は物理・化学・生物から2科目であり、普通科理型の教育課程も化学と物理または生物の選択のため、2科目の履修となっていました。したがって、医者を目指す高校生が、物理または生物を高校の授業で全く学ばないまま、医学科に進学していたことになります。

高校で本来学ぶべきことは、大学合格のためだけのものではなく、その先の将来の夢や志のためのものであるはずです。理数科の設置により、医学科を目指す生徒も理科3科目

を学習する機会が与えられ、真に理数系のプロフェッショナルになるための教育を目指すことが可能になるなど、本来の学ぶ姿を取り戻すきっかけになりました。そして、後に大入学後に自分の夢に向かって羽ばたくという、「Will Project」の取り組みに繋がることとなります。

理数科では、数学理科の単位数増、理科の3科目履修、課題研究、スペシャル講座、地元能代にある県立木材高度加工研究所との連携など最先端の研究に触れながら、柔軟な思考力と創造力を養い、理系難関大学の進学率アップと、将来の研究・技術者の芽を育むことをねらいとして、様々な授業が行われてきました。理数科でしか経験できない様々な体験を、将来の飛躍に生かし、能代高校理数科の卒業生がノーベル賞を受賞する日が現実になることを期待しています。

理数科の思い出

80期 京 久幸

私が能代高校理数科を卒業したのは5年前になりますが、今でも、あの場でたくさん

ことを学べたのだと実感しております。普通科とは少し異なったカリキュラムのもと、また当時秋田県教育委員会が海外派遣プログラムを主催していたという幸運もありまして、貴重な経験を数多く積むことができました。

理数科の特色はなんといっても、課題研究という独自のカリキュラムでしょう。毎週ごとに授業1コマ分の時間を使い、いくつかのグループごとのテーマについて研究を行うというものでしたが、今思えば、これは研究とはどのようなものなのかを知る絶好の機会でした。特に知識もない中で、先生方、あるいは木材高度加工研究所の皆様方に助言をうかがい、グループみんなで議論しました。そして成果を、全県の理数科合同研究発表会にて発表しました。これは貴重な経験であるとともに、理数科のクラス全員で親睦を深める機会でもありました。卒業から5年経過し、皆がそれぞれの道に進んだ後も、理数科メンバーで集まることができるのは、このようにして親交をはかれる機会が多かったことが大きいように思えます。

またこの発表の後、私のグループは秋田県教育委員会主催の高校生海外派遣プログラムに参加し、大館鳳鳴高校の生徒とともに韓国・ソウル高校を訪問する機会をいただきました。英語で研究内容を発表する機会などそ

れまで一切なく、何をしたらよいのか全くわかりませんでした。先生方の助けもあり、どうにか発表の準備ができました。またソウル高校を訪れた際は、ソウル高校生徒の英語力や研究内容のレベルの高さに驚かされました。海外を訪れて意見交換や交流をするという、なかなかできない体験ができ、理数科を選んでよかったと心から思います。

大学で研究をする際には、英語で発表したり、研究室内のメンバーと議論や意見交換をする機会には本当にたくさんありました。その際に、理数科の課題研究であらかじめそれらを体験してきたことは、非常に強い土台と



韓国ソウル高校との交流

なっていたことに気づかされました。のちに理系のフィールドで日常的に行われる英語発表やグループでの議論を経験することが、何より大きな財産であろうと思います。理数科におけるこの取り組みが、今後も続いていくことを願ってやみません。

最後になりますが、高校時代にお世話になった先生方、木材高度加工研究所の皆様方には感謝の言葉もございません。今一度、この場にて心よりお礼申し上げます。

理数科課題研究による 自身の成長について

84期 鈴木 岳 大

私は今、秋田大学でロケットの勉強をしています。大学でロケットの勉強をしようと思ったのは能代高校理数科での課題研究でロケットの研究をしたからです。

私はJAXAのロケット実験場がある宇宙のまち能代で育ち、中学生のときに、当時国際宇宙ステーションに滞在していた宇宙飛行士の野口聡一さんと交信したことで宇宙に興味をもちました。それは、能代高校に進学し、

理数科で勉強するようになってからも変わっていませんでした。理数科には班ごとに決めた研究テーマで研究して、成果を発表する課題研究があり、前年度まで物理班は缶サットを研究していました。ロケットのほうが宇宙と結びつきやすいと思い、ロケットの研究をすることにしました。

8月に行われる能代宇宙イベントのロケット甲子園という大会に出場するために、当時秋田大学で講師をしていた和田豊先生にロケットについて教わり、そこから、設計ソフトを使ってロケットの設計をし、市販のモデルロケットの部品をもとに製作を行いました。また、生卵をロケットに搭載させ、それを割らないように着陸・回収するために、私は生卵を入れる卵ボックスの衝撃吸収について試行錯誤しました。その結果、ロケット甲子園で優勝し、アメリカで行われるTARC2013への出場権を獲得し、出場しました。

私はこの課題研究から目標にむけて試行錯誤した経験を得ました。私は現在大学2年で研究室に配属されていないのでこの経験をまだ活かしてはいませんが、今後必要となる経験になると思います。また、この課題研究で英語に対する抵抗が無くなりました。というのも、アメリカに行ってネイティブな英語に

触れただけでなく、設計ソフトの英語と格闘したからです。そのおかげで、大学にたくさんいる留学生に英語で話しかけられても、拙い英語でもコミュニケーションをとれるようになりました。

課題研究でこのような経験ができたのも、指導してくださった先生方だけでなく、能代高校同窓会をはじめとする地元の方々のおかげです。この感謝の気持ちを忘れずに今後の研究活動に取り組みたいと思います。

最後に、能代高校創立九十周年おめでとうございます。



TARC2013